

和歌の句切れ 確認テスト（初句～四句切れ） 解答・解説

■ 解答・解説

問1 句切れなし。

問2 初句から結句の「ぬれつつ」まで、途中で文を言い切る形（終止形・命令形・係り結びの結び・終助詞・体言止め）がなく、一文で続いているため句切れなし。「あらみ」は「～が…なので」の意の接続表現、結句の「つつ」は反復・継続を表しながら余韻を残して続くため、ここでは句切れとはしない。現代語訳「秋の田のほとりの仮小屋の、屋根をふいた苦の目があらいので、私の袖は夜露にぬれ続けていることだ」。

問3 「つつ」は動作の反復・継続を表す。結句を「つつ」で終わると、言い切らずに動作がいつまでも続く感じを残し、しみじみとした余情・余韻を生む効果がある。①の歌では「露にぬれつつ」とすることで、袖が夜露にぬれ続ける寂しさが尾を引くように印象づけられる。

問4 二句切れ。

問5 第二句末「来にけらし」が、過去推量の「けらし（＝けるらし）」という言い切り（終止形相当）で結ばれ、ここで一度文が切れるため二句切れ。「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形、「けらし」は「けるらし」の縮約で、過去を回想しつつ推定する意。

問6 「夏来にけらし」の訳…「夏が来てしまったらしい」。

問7 句切れなし。

問8 初句から結句まで一続きで、途中で文を切る形がない。結びの「つつ」は「降りつつ」で動作の継続（雪が降り続けている様子）を表し、言い切らずに余情を残して終わるため句切れなしとなる。現代語訳「田子の浦の海辺に出て見渡すと、富士の高い峰に、真っ白に雪が降り続けていることだ」。

問9 句切れなし。

問10 「声聞く時ぞ…秋は悲しき」と、第四句の係助詞「ぞ」を受けて結句「悲しき」（形容詞の連体形）で結ぶ係り結びになっており、その結びは一首の最後にあるため、途中で文が切れない。よって句切れなし。

問11 「ぞ」は強意の係助詞で、文末の活用語の結びを終止形から連体形「悲しき」に変える（係り結び）はたらきをもつ。現代語訳「奥山で散った紅葉を踏み分けて鳴く鹿の声を聞く時こそ、秋はとりわけ悲しく感じられることだ」。

問12 ④の歌は句切れがなく、初句から結句まで一気に詠み下される。途中で切れないことで、紅葉を踏み分け鳴く鹿の声から「秋は悲しき」という感慨へと、流れるようになめらかに続き、しみじみとした秋の悲しさが一首全体を通して途切れずに高まっていく効果がある。

問13 句切れなし（結句は体言止め）。

問14 初句「これやこの」から結句まで一続きで、途中で文を言い切る形がない。「行くも帰るも」「知るも知らぬも」は対句で、いずれも「逢坂の関」を修飾しながら続き、結句は体言（名詞）「逢坂の関」で止め

る体言止め。文の切れ目が句の途中・句末に現れないため句切れなしとする。現代語訳「これがまあ、あの、京を出て行く人も帰る人も、知る人も知らない人も、別れてはまた逢うという、(名のとりの)逢坂の関なのだなあ」。

問15 二句切れ。

問16 第二句末「移りにけりな」の「な」が詠嘆の終助詞で、ここで言い切って文が切れるため二句切れ。「けり」は気づきの詠嘆、「な」がさらに感動を添える。

問17 「移りにけりな」の訳…「色あせてしまったことだなあ」。現代語訳「桜の花の色はすっかり色あせてしまったなあ。むなしく時を過ごし、私が物思いにふけて過ごしている間に(私自身も衰えてしまった)」。

問18 三句切れ。

問19 第三句末「悲しけれ」が、第二句の係助詞「こそ」を受けた係り結びの結び(已然形)であり、ここで文が完結して切れるため三句切れ。

問20 「ものこそ」の「こそ」を受けて、結びが已然形「悲しけれ」になる係り結びだから。現代語訳「月を見るとさまざまに物事が悲しく感じられることだ。私一人だけに訪れた秋ではないけれど」。

問21 三句切れ。

問22 第三句末「見えつらむ」が、初句の係助詞「や」(「寝ればや」の「や」)を受けた疑問の係り結びの結び(連体形)で、ここで一文が完結して切れるため三句切れ。現代語訳「あの人のことを思いながら寝たので、あの人が(夢に)現れたのだろうか。夢と知っていたら、目を覚まさないでいたものを」。

問23 二句切れ。

問24 第二句末「折らばや折らむ」の「折らむ」が、係助詞「や」を受けた係り結びの結び(連体形)で、「いったい折るのなら折ろうか」と一度言い切って切れるため二句切れ。現代語訳「あてずっぽうに折るなら折ってみようか。初霜が置いて見分けられなくしている白菊の花を」。

問25 句切れなし。

問26 初句から結句「逢はむとぞ思ふ」まで一続きで、途中で文を切る形がない。結句では係助詞「ぞ」を受けて「思ふ」(連体形)で結ぶ係り結びだが、その結びは一首の最後にあるため、途中で切れず句切れなしとなる。

問27 「逢はむとぞ思ふ」の訳…「(必ず)逢おうと思う」。現代語訳「川の瀬の流れが速いので、岩にせき止められた急流が二つに分かれても、その後にはまた一つになるように、(今は別れても)行く末にはきつと逢おうと思う」。
